

序 文

徳川幕府の開設以来、生糸の需要は国内に限られていましたが、1859（安政6）年の横浜等の開港を契機として生糸のみならず蚕種までが一気に輸出に転じ、国際市場へ進出するという流れに変わったことは史実の示すところであります。

この大きな要因はフランスで始まった蚕の微粒子病がヨーロッパ全土に波及し、生糸や蚕種の需給関係が大幅に崩れた結果でありますが、同時にわが国の輸出の増大に伴って生じた粗製濫造や悪徳商人の横行が輸入国側に大きな損害を与え、わが国への非難の声は増すばかりの状況を呈していたようであります。

特に1868（明治元）年と翌年には生糸と蚕種の暴騰が起こり、これらを取り扱う外国貿易商社では悲鳴を上げる状態となり、遂にはその原因究明のためイタリアやイギリスの公使館では外交官の特権を利用して専門家集団による実地調査を試みました。

この一人がイギリス公使館の書記官のフランシス・オットィウエル・アダムズです。彼はイギリス、フランス、アメリカの貿易商社に勤める生糸専門家を同行させ、生糸や蚕種が高騰した原因を探るため1869（明治2）年と翌年にかけて養蚕製糸の盛んな地域を2回に亘って実地調査を行いました。そのうちの1回目に同行したフランス人の一人がのちに富岡製糸場の指導者となったフランソワ・ポール・ブリュナでした。

アダムズは現地調査の結果を4部の報告書としてまとめました。これは在日公使のハリー・パークスに提出され、さらにパークスは本国の外務大臣に提出するという極めて本格的な報告書でありました。

アダムズはこのような行動を取る一方、明治政府と外国人の横浜商業会議所にもいち早く情報を提供し、生糸や蚕種の高騰の原因を明らかにしながらその緊急対策を講じるよう提言や要望をいたしました。

この程、富岡製糸場総合研究センターではアダムズのすべての報告書と第1次報告書作成のためにアダムズに提出した資料をもとにブリュナらがフランス語で著した記録を収集することができました。

これら5点の資料はそれぞれ独立してはおりますが、強い関連性があり、また論点が次第に発展しつつ一定方向へと収斂しているように見受けられます。

殊に、第4次報告書が提出されて間もなく、明治政府は官営製糸場設立の議を決定し、それが富岡製糸場設立へと実現されました。富岡製糸場の設立に関わったリーダーが前述のブリュナでした。

アダムズの報告書は一定の方向性を示唆していると思われまますので、富岡製糸場の研究の一助になればと考え、これらをすべて日本語訳として公刊することにした次第です。

大勢の研究者のご参考になれば幸甚です。

平成23年3月

富岡市長 岡野光利